

コロナ禍のピンチをチャンスへ ～ITで繋がる釧路認知症自主研修会の実践～

瀬下 義正（セシタ ヨシマサ）

北海道認知症介護指導者／医療法人社団田中医院 デイケアセンターさくら リハビリテーション部 部長

◆施設概要

田中医院は北海道の道東で1977年より地域医療支援を実践してきました。田中医院に併設するデイケアセンターさくらは、2006年から3時間以上4時間未満の短時間に特化した事業運営を実践しています。

リハビリテーション専門施設として、地域に求められる要望を柔軟に受け入れ、対応できる施設を目指しています。施設理念の一つに、リハビリテーションの啓蒙活動を行うことを掲げています。この理念を実現するため、2006年より年1回の頻度で家族報告会を開催しています。家族報告会における家族の定義は、利用者・同居家族だけでなく地域に住む住民も含むこととしています。家族報告会の特色に、デイケア利用者さん自身が身体や精神面での変化を家族・地域住民へ発信していくことがあげられます。過去の家族報告会では、大腿骨頸部骨折により要介護3となったデイケア利用者さんが「100歳を前に～俺のリハビリ～」と題してデイケア職員と対談したこともありました。この家族報告会の実践は、平成27年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等推進事業として一般社団法人全国デイ・ケア協会がまとめたリハビリテーションマネジメント実践マニュアルに掲載されています。その他、法人内の関連施設である通所介護施設や訪問介護・グループホームとの合同カンファレンスを定期的で開催し、リハビリテーションの視点から自立支援に取り組んでいます。

◆取り組み内容

【倫理的配慮】

本報告に際し、アンケートデータ収集ならびに画像使用・画像配信について口頭にて説明し同意を得ています。

【取り組み概要】

釧路認知症自主研修会は、2017年より釧路地域のリハビリテーション専門職向けに認知症の人を支援する自主研修会として認知症介護指導者が単独で企画・運営を実践してきました。この理由は、リハビリテーション専門職の領域では認知症の人を支援するための教育制度が不足していると感じたためでした。2019年度より他職種への周知を開始しました。

開催回数は年度により異なり、令和4年度は全12回の開催を予定中です。各研修終了後にはアンケート調査を実施し、毎年3月に開催する次年度研修内容の企画立案に役立てています。

研修開催の周知は、メールリスト機能や公式LINEアカウントを活用しています。同時に、北海道内のリハビリテーション養成校や各市町村担当者など計20施設へ個別に周知を行なっています。

2017年から2019年の集合型研修の主な内容は、コミュニケーション演習や認知症のタイプ・BPSDの理解や事例検討でした。

2020年の研修から、新型コロナウイルスの影響により開催方法を変更せざるを得ませんでした。そこで、全研修をZOOM（以下、IT研修）へ切り替えました。

2020年度及び2021年度のIT研修の特徴をハード面とソフト面に分けて説明します。ハード面とは、企画運営のための手続きや研修全体の枠組みのことであり、ソフト面とは、研修の質に関するものを示します。

2020年度研修のハード面の特徴は、IT研修へのアクセス方法やアンケート入力方法を説明した動画を作成したことです。これは、IT研修への心理的不安を軽減することが目的でした。また、研修中にアンケート機能を活用し参加者の人数・参加地域のデータ収集を始めました。

ソフト面では、事例検討を中心にコロナ禍前から参加いただいていた方々へリレー形式での特別講師を依頼しました。コロナ禍の当初、各講師が通常業務に加え感染症対策などの業務量が増えたにも関わらず、本研修会の重要性を理解し協力いただけたことに感謝しています。また、数名の仲間とともに、みんなの認知症支援にず～むin企画を開始しました。企画内容は、研修参加者が7分間で自分自身やチーム支援の成功・失敗事例をパワーポイントでまとめ情報発信するというものです。2020年度ならびに2021年度企画では、各6名の方々にご発表いただきました。

2022年度は12月の開催を予定中です。

2021年度研修のハード面の課題として、前年度から開始したIT研修において参加者の自発的な質問が少ないことが挙げられました。そこで、研修中に5～6名程度で意見交換を行う時間を設け、IT空間でも安心して自由に発言できる雰囲気づくりを行いました。司会はず～むin企画の仲間に依頼しています。少人数での意見交換後、全体集合画面に戻ると表情を確認できる参加者が増えていることが特徴です。

次に、ソフト面ではアルゼンチン在住の作業療法士さんを講師に日本人のコミュニケーションの特徴について考える研修を開催しました。参加者から日本とラテン系の国におけるスキップの違いなどに関して活発な意見交換が行われていました。また、各月の研修をアーカイブ配信として情報配信する取り組みを始めました。この理由は、コロナ禍の感染症対策業務や急な勤務シフト変更などの理由により、研修会に参加できなかった方々が研修内容を確認できるようにするためでした。現在、このアーカイブ動画は北海道内のリハビリテーション養成校において、コロナ禍で臨床実習が中止となった学生への教育教材として活用いただけるなど広がりを見せています。

【各年度参加者数の特徴と感想】

2017年度から2021年度までの参加者総数は590名でした。2020年度のIT研修への変更後、年度別参加者総数は増加傾向となっています。2020年から2022年の参加地域別の割合は、コロナ禍以前の地域から平均44.7%、北海道内の参加は平均46.9%でした。他府県（海外を含む）からの参加は平均8.4%となっていました。

この実践報告を作成するにあたり、発表内容の一部を釧路認知症自主研修会公式ラインアカウントに登録している参加者へ情報発信しました。この目的は、受講感想を一言でまとめたコメントを集めるためでした。研修参加者のコメントを職種・所属施設別に表1に記載します。

表1

職種・所属	釧路認知症自主研修会受講の感想
介護支援専門員	釧路認知症研修会は、仲間づくりが出来る場所です。
看護師	認知症ケアについて集中して学び自分のケアを振り返る場所です。
リハビリテーション養成校学生	幅広い視点かつ、その人に合った支援に結びつけるプランを考えることが大事だと思いました。
医療機関	BPSDの原因を背景因子から探ることで患者さんが穏やかになった。患者さんの見方が変わった。
医療機関	業務内容の辛さや疲れなどモチベーションが下がっている時ほど、研修会参加後にまた、頑張ってみようとワクワクする自分に驚きます。
老人保健施設	組織内でこの研修会の参加を呼び掛けたところ、他部門課長が「面白そうじゃないですか」と、参加呼びかけに協力してくれた。

【今後の課題】

- 参加者人数について
釧路認知症自主研修会は自発的な参加を大切にしています。この研修会の継続を意識していきたいと考えています。研修会に参加した一人ひとりが、職場の同僚や知人にこの研修会への参加を呼び掛けた結果として参加者数が自然発生的に増えていくことを期待しています。
- コロナ収束を見据えて
集合型研修とIT研修の組み合わせによるハイブリット研修を予定しています。グループワークの実施方法や意見交換の方法など、さまざまな障壁が予想されますがコロナ禍でもこの自主研修を継続できたことを糧にチャレンジしていく予定です。
- ず～むin研修に関して
過去のず～むin研修では12例の事例収集ができました。今後も年1回のこの企画を継続していく予定です。事例集積を重ね、個別事例への対応例や支援ポイントをまとめた事例集を作成していきたいと考えています。